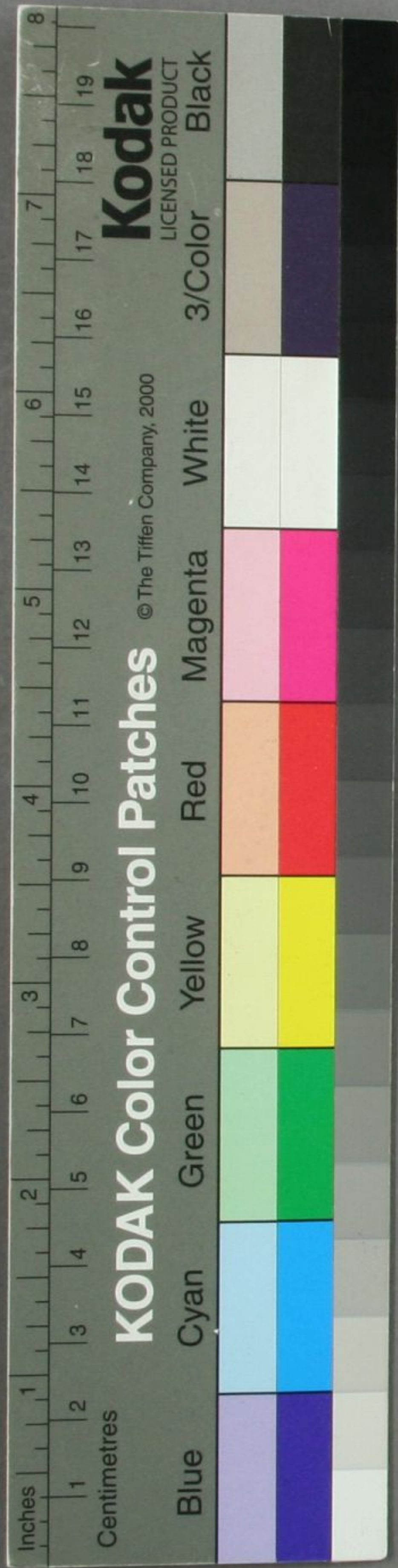
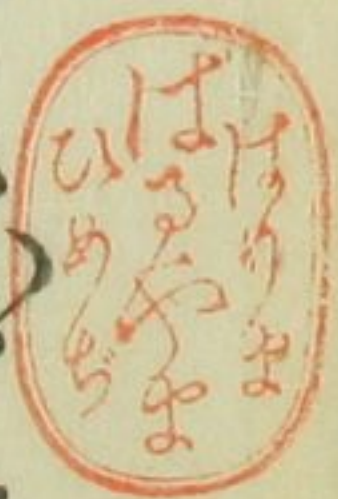




中村俊定文庫  
文庫 18  
471



三月三日 櫻をば みるを  
かき 次といふも なるけい 比  
せし 海なる 海なる 比  
夕々 終なる 比 終なる 比  
昔も 切なる 比 終なる 比  
きし 終なる 比 終なる 比  
終なる 比 終なる 比 終なる 比



老人日記を結ぶとやうに  
梓もろもろの其いづれを  
くくもれい雪原館を隣  
干時明和辛卯秋九月



巻末

金沢行



いづれ後の月を他の國からめとぬる  
ろくろの日のりとのむらやする人のうゝ  
ぬるく七つの月をたふさう入る海根  
波をいづれを沙代の長月をいづれを  
りやをいづれをぬるよおひひとこはん  
とるを武藏にほく金沢の月をいづれを

やと叫あふ人へ母のふりかへて  
松蔭おひひともぬいつの日か  
阿かうちよふとめよそはふもあつた  
十一日の秋より松蔭亭よおこりて  
室をけしめしは蔭堂れ月のおほつ  
かうりしを曉ちうし星の影を  
うち志きれを充てふ杖をひふ  
尻おろしうかけて先うし  
いふに  
あふのいひる句

秋蔭堂ひしはのいとふえ 松蔭

富屋を充てふ人病をきり  
たちあへぬる旅蔭か  
いふ事なりしとあはふ

只ふぬ蔭をうへる田舎れ 富屋

他は世をうへるも松蔭うへる又逸がえ

その事このる志けりける中より約  
ぢーをたぐーと漸進さうりて

ぬきををぬけりり舟の旅 逸歌

飯倉神明宮

玉いさうてあゆととこひな経法家の  
おうーとうれーとこひな経法家の  
神系をてまけりあゆちりやとこひな経法家の  
ふさささうものささ経ふちりて月見る

旅めとめてちやうとんといたのりー

法乐 燈を友の名聲とて

|               |    |
|---------------|----|
| 稲妻や人をさよめの本林屋  | 人た |
| ささの目けよとむや生葉市  | 実屋 |
| 乙女れれれも一ふさ蒲萄うれ | 松隣 |
| 神垣や葉りて更ふけ生葉市  | 仙凡 |
| 市をさーとあわうのた生葉  | 逸歌 |

止波浦

宗祇法師の日記めは海士のまゝ屋敷くよと  
侍りしう今も魚鬻家と敷も志く次造  
あゝ屋敷てふき肆といふ

船病や先染ふれ芝さうか 葵をた

高橋

秋の海よそれ木の葉もちきるやうよん夜  
さういふ病さるみなりなり敷志ぬ中ふ  
志きる人もいさうとゆう

船病や竿の志きりも江戸の海 仙凡  
朝風や旁れむひの妻房と縁 逸契

海晏寺

旅笠も是より濡く初お葉 逸契  
小さう一死を言川筋りとも 仙凡  
鈴鹿八幡法示

旭ふくやまき松葉を花子水 松隣

乃くさ

狂風も追ぬるより秋乃地 魚波

はるる葉よ音を好ふ小蝶か 人花

取らぬ夜の明く蕎麦の巻 松隣

来ふ子もも感ある人薦はる 逸客

眸よりくこの田の表や秋乃草 葵太

浦嶋太郎塚

風と見し秋やたちまち波の皸 貞波

神奈川

とぞ春の芳き堂ぬより消息せられて春風と

いふふとのりとも春をまけりといふ入る床の

阿ふと見えあけぬと亡人白牛の筆して

磨りける自画のこゝ

梅咲く都れを春の白牛 亡人

橋あふても春の袖の香のちううとも春も

おのひうけにけ一袖の香みかきうるそらふ

ふかき春のうけくこの魂もさううと在る

ん地ぢるる名画よよする懐四のあらを

旁れ月梅より縁のうらさうか 人た

そ人の香もかうり梅紅葉 逸雲

月を秋喜やむしれ縁そと 富屋

月いとわのうねる香のほと神の浦より杖を

曳く

はるさうとまや声く神乃浦 松隣

夕潮や月より神を浦の月 葵太

秋をさやふさぬうて神の浦 逸雲

程ヶ谷

朝をや帷子橋みきる富士 富屋

うちうさ

花柳より細絲よりゆき穂葉うさ 魚紋

星落るる夜もあけに神を菊 松隣

秋のせや姫葉の花乃見知に 仙凡

月をや沈きふをを花のよ 葵太

昨日夢をうき晴る月の出汐も思ひやる  
程ヶ谷よりうきうき細路をのほろり  
衣ひきりきりてゆくはさき花のかうめを  
おろしとれとう枯のかさやとれもく  
ちと目馴ぬきくさき人くともおろし  
めでもてゆくもおうかきくは酒家お  
あききく後者等のものも人の怪よくせ  
これと一文子ひくぬも是をすく又字は破てと

あり——ふりふ日記まきくあうもと思ひ出も  
猿の一無ちう——

法味くむ目わいお井の山臨うれ 葵太

能見堂

筆拾松の下よりち乃ゆりく頭をめくせそ  
きうよう川の井らうちとすく一身風光  
一味はちうりて目のくくをきくはる船ゆく  
のふるもをく下よやいと八の住系をきく揮て

洲崎晴嵐

新に江は麻鈴より雲をよ 魚汶

瀬戸秋月

瀬田磯より波の瀬戸之橋乃月 葵太

小泉夜雨

あつめい余市秋より雨秋より 富屋

乙種海帆

夏時や秋一帰帆乃何百里 逸賀

称名晚鐘

入おやよんとの夢より鯛鱈 松隣

平澤落居

落まゝや居る志より此時煙 人在

野崎夕照

阿しした浪より細より日くれ 仙仇

内川書香

山うけて花の書香や夢麦 畠 岩沼

卷之二

122

金沢

日、いさふきり、水もなまじ月思ふふ女が思ひ  
亭の長何来たりとに座してきりてむ佐居

けりしをよもやとてふにけりしむきも  
 はめやぬ柱を清くしめし路をたづね  
 あゝためそ又この一途にのけるまゆ  
 さきふ貝の白めたる夕月映しそき  
 思ふ心地をや抱きてめ後ふりまうり  
 こそ路をりの船頭をりめ出し酒さうか  
 入法まうしぬきまをほひてけり  
 中流に漕出たりけりふ川の橋より潮を

へく秋をよもやとてふにけりしむきも  
 こそりし路を清くしめし路をたづね  
 めめやぬ柱を清くしめし路をたづね  
 あゝためそ又この一途にのけるまゆ  
 さきふ貝の白めたる夕月映しそき  
 思ふ心地をや抱きてめ後ふりまうり  
 こそ路をりの船頭をりめ出し酒さうか  
 入法まうしぬきまをほひてけり  
 中流に漕出たりけりふ川の橋より潮を

くさくさうり名にふる所くさる心越無生のなるを  
はく——急好法師の歌に集ふもふたふたの  
あさちの庭乃ちあはれふかそこら草花やとやる  
月うれとは世今決まらふありとくはる古の  
風烟を流る水やうかう——夜半の鐘声  
たりとふいといふもふたふたのうらなを忘る

本うくして麻火をききう後の月 葵太  
入江をふもふたふたの月 人花

後の名をふもふたふたの月 魚紋  
以中をふもふたふたの月 松隣  
江みねのふもふたふたの月 富屋  
うらなをききう後の月 逸契  
稲むらうをききう後の月 仙凡  
あのか麻をききう

見う——あか焼むらうの月 逸契  
波をききう——あか麻の月 松隣

三声やと海をくまう岸の麻 魚波

旅庵

園ありと思へるは月夜の庵 葵太

荏の浦

海に入らぬのうや松乃影 人花

一覽亭

一日瑞泉寺に詣り源基氏の建立之編畧  
一覽亭此跡を夏家園所在禪窟の後乃

山より乃を事十八曲玉所の待歌あり

天封尺地許歸休 致遠釣溪得自由

到此人々眼皮綻 河汝風景我馬度

前も又うらなる山にいはりあり

本末めけく庭の志くき

是を始くく一百二十余篇古人乃詩文  
章其風流をけり

一覽れもくく縁をうりて津厂 葵太

松隣

逸賢

富屋

仙凡

魚波

六浦

幸き世と力と志と業と六浦臨

葵太

朝比奈切通

落葉や巴峽よりけぬ雪のよの

魚汶

いの栗や三浦の殿のちうゝ福

岩沼

梶原屋敷

花菱より二夜の延あり梅紅系

仙凡

菅原屋敷

大葵や花菱より時の屋敷に

松隣

滑川

侍れ鯉よりしんをりり川

人花

のそくそく言さるる水の月 富屋  
庭葉や音もさうとふり川 逸賀

大倉御所

此下柳やうきよのとも眼のりり 松隣  
白銀れ猫やうきけき草乃家 葵太

雪の下

一輪賞翫とく神人のりし組板をうりて  
舞き侍はうきこの舞や秋の風 葵太

瀧島八幡宮法楽

夕雲や末社くも下とくち 葵太  
橋やうれをうき世のきふきと 人花  
久くぬねや葉落る瀧の島 松隣  
白燈や報喜りうきの花よき 富屋  
新酒や八醜うきすめ神意 逸賀  
木屏よきくのきふりり 仙凡  
漁舎や月のきふみーふ 魚波

文治二年四月八日新白無沙蓋而此沙社は  
諸君の静女を思ふ廊下をく舞曲をふくめ  
らるるを粧親もよのあつりようひく

賦や志の静るうく秋の蝶 葵太

建長寺

秋風より帝捨り建長寺 人た

十六井

琥珀く井もいふよやあつり月 奥波

尾沙所

紅葉よまや荒るる此丘尾を 全

名あるまうこ見あつりくそ青は長空よ  
止るまむう一先所嵐を大に吹て名月を  
南をけり以頂珠とはるも新得る所  
高吹あつり一ち紙を吹を追く

旁此香や新ハ玉乃の以頂珠 富屋

阿佛屋

ふやこのまづきをいつの世のつらさを  
もてしめひーきーを思ひ出さ

尾君の或秋夜とや波乃舟 葵太

稲村ヶ崎

太刀突やえ弘のむー拍浪 松隣

加賀松懸松

暮らけて陀羅尼のうらま松の声 人花

七里溪

朝多や智の下ゆ波うら 仙凡

貝も又子種の秋や浪はひ 魚波

荒波のさうー金砂の秋の蝶 逸契

腰越

あむさうー秋の浦の甲斐ーあーさきさの  
初を流るゝはふんと海を渡るひよけり  
干涙を流るゝはふんと海を渡るひよけり

神業や月よさうらる玉ーハ 魚波

松風も琵琶や弾む時秋 人た

兒の淵

白菊や空より波うら 逸賀

龍穴

苔うらう洞より遠く朝日か 家屋

岩本院於富士見亭法永

歌仙貝

さうし貝 簾ゆく童子うらう月と富士 夢太

さうし貝 陽より橋根乃秋より酒 松隣

さうし貝 落きては東のゆく年をねて 人た

さうし貝 朝風よりとさめさちふ 仙凡

いふや貝 菊並はも同じ板屋の古階子 魚汶

さうし貝 志う髪めてさうさあそもも梅 逸賀

志賀

一は家の隣うう喰をいう物也

富屋

加貝

うやこくの下の水を追く

左

おあ

相阿き代も治りて玄園也

隣

うう

うううの唐紙らううう

太

いろ貝

色は出流籠を葉の楯よりて

此

枕貝

海うううのう枕多き粉也

汶

梅花貝

冬の木の香房を梅の花かう

賀

阿貝

あう屋の里れを有るも

屋

ろ貝

江ううも連うぬ螺を吹あつて

太

海貝

ふうひ簇のみうさうう

隣

花貝

雪の日のあつた花は照る海也

賀

さう貝

うなる水いつてうう海鯛

凡

ちう貝

いせうう黄うあうと蛸汁

左

さう

佐田へちの尾のううう

屋

小貝

小のひかまうりて牛の葉わう

汶

あう

冬もさうはうあう子

太

みそ貝

みそ貝をとりし里下りの日る市女笠

花

抱貝

檐桶より抱の阿りぬ過う

隣

うづせ貝

玉智のまゝ近せもさゆに

凡

かみ貝

かみ貝くれ本履そく靴

賀

波る柏

紋取も波るうゝその踏あひ

太

あや

同一とあやれ松を存せ次

汶

ちき

ちきとみさの月をうりぬり

隣

きぬ

貸きぬこれ今やうらん

屋

いさ

お愛うたつてこのころ梨

賀

むき

うきむきうき通夜の志のめ

凡

蛤貝

蛤貝もきぬ細くぬりぬ

屋

あき

あきうかうみ合のやうに

花

か

所愛けと花をうみ暑う次

汶

ちきり貝

むろひくく百千なり貝

枕

神の浦ちうにありてみ海連し

待得しうりてちぬ都をみ林檎

松平

夕霧の地しちもあしうりたさうか

朱梅

うちつけし日和同り月の旅

阿人

追加

十月十日あきり福倉山の秋の歌  
思ひ立給ふ作し茶花約せしあきの  
いさうら花なりしとるものあきさるを  
ないあきさるのうらをさひやりて

今時分春やめつしむおきし歌

是物

八条ぬあきの宮や月如篇

三思

六浦とは見ぬを月の名をよ

是物

一とせ福倉の杖を愛し

屋敷のしちぬ葉のまもるるを

乙児

其家ハあき日よあきそ鶉の毛

周作

骨折る鶉の毛つしうり秋のあ

雷堂

|                |    |
|----------------|----|
| 白くくも只あろうくそ花を握  | 吐月 |
| えよりねとるあゝのりもあが  | 連丈 |
| 義虫のあらやとさよあ時ぬ   | 青面 |
| 名月や露よつねは片男波    | 山幸 |
| 素ちてふあもふるきりくさ   | 文来 |
| あゝ菊ようさせと消る紙幅のれ | 六窓 |
| 明けや小麻の角の首うつ    |    |

